

---

# 夢追い人の幻想

梅干し

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢追い人の幻想

### 【Nコード】

N3200J

### 【作者名】

梅干し

### 【あらすじ】

主人公の国広<sup>くにひろ</sup>勇人が幻想郷で自分を取り戻していく話です。最後まで続けていきたいなと思っています。

## 第1話（前書き）

初投稿です。

気長に続けていけたらいいなと思っています。

（なお、これは東方 project の二次創作となっております。）  
苦手な方は戻ることをお勧めします）

初心者をつたない文章なので、ご注意ください。  
最後に見てくださった方に感謝！！

## 第1話

夢を見ることに恐怖し、夢を追うことに絶望していた。

俺は、いつも何かに怖がっていた。

それは、自分以外の人間であったり、そいつらの視線であったり、薄汚れた自分自身であったりした。

他人の俺を見る目はいつも汚れたものを見るようだった。

他人の小言はいつも俺をバカにしたようだった。

他人の笑い声はいつも俺への嘲笑だった。

他人の差し出す手はいつも黒く淀み、融けているようだった。

そんな中、俺はいつも自分への侮蔑をやめなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

いつの間にか、どこかにいた。

皆手を取り合って、笑ってくれている。

俺を囲んで、笑ってくれている。

信じられなかった。

だっていつも俺はいなかった。

どこにも存在しなかった。

でも、皆笑ってくれている。

嘲笑でもせせら笑いでもなく

純粹に正直に。

嬉しかった。

全てが眩しかった。

だから、俺も笑えた。

すると、どこからともなく、手が伸びた。

ハイタッチ・・・。

俺を誘ってくれている。

近寄って、手を触れようとして・・・

——ブツン——

そこで、夢が覚めた。

目覚めて俺を歓迎してくれたのは、笑いあう人々でも、ハイタッチしてくれる手でもなく

薄暗い闇が覆う、深い森の中だった……。

やっと動き始めたのは、目覚めてから十数分後

それまで、自分の記憶を辿っていたがどうしてここにいるか分からず考えるのが面倒になって、とりあえず歩き始めた。

「……暗い。夜、なのか？」

見たことの無い暗闇の中、一人ごちる。

「……しばらくたつた、正しくはたつたはずだ。次第に闇が濃くなっているような気がする。」

「……行けども行けども暗い森。」

自分でもこれだけ長く歩いたのは初めてだった。

それほど動いても、どこにも辿りつけなかった。

だが、一つだけ状況が変わった。

俺の後ろに何かがいる……！

確かめたわけじゃない。

だが、確実に何かが背中越しに潜んでいる。

伊達に、人間を嫌っていない。自分の近くに何かいたら、気配ぐらいは読める。

こんな森だ。いるなら、猿か？猪か？熊か？そんなものだ、そんなものはずだ。

だが、背後から伝わる気配……なんとなく、もつと恐ろしいもののように思える。

こんな状況じゃなければ、振り払えなくも無い。

だが、ここは来たこともない見知らぬ土地だ。さらに周りは漆黒の

闇。

何が潜んでいるかも分からないのに、こちらから仕掛けたら・・・マズイ。

このままこうしていても状況が好転しないのも確かだ。

ここは・・・走り抜ける！

俺は、背中にまわりついていったものなど気にせず・・・走った。全力で・・・最速で・・・

しばらく走って息も切れたところ、ちょうどその直後だった。目の前にやっと、光を見つけた。

それを見たたん、俺は走るのをやめていた。

「・・・・・・・・つ。・・・・・・・・つ。」

息一つまともにならないでその場にへたり込んだ。もう、走っていた理由など忘れていた。

「・・・・・・・・ふう。」

光がここまで安心できることを知らなかった。

やっと一息ついたとき、また・・・だった。

あの気配が、近ずいてきていた。

「・・・・・・・・つ！」

ここに来て、また見たことが無いものを見た。

気配が近づくにつれ、闇が近づく。

周りの空気が変わるとはこのことだろう。

光があるのに、ねっとりとした闇の気配が周りを包んでいく。

そして、気配が目の前に来たとき、そいつは姿を現した。

光が闇を打ち消し、目の前に立っていたのは・・・少女だった。

正直、拍子抜けもいいところだった。

目の前の少女は10歳くらい、幼い容姿の金髪赤眼、頭にはリボンが踊っていた。

さっきまでの、気配は・・・この少女なのか？信じられない。

ひとしきり不安が残る俺に、彼女の第一声が飛び込んだ。

それは、明るく、楽しそうで、弾むような、俺に対する、死刑宣告

(?) だった。

「ねえ・・・あなたは、食べてもいい人類？」

## 第1話（後書き）

こんな小説をお読みくださってありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3200j/>

---

夢追い人の幻想

2011年10月5日14時32分発行